

高知県鏡村
吉原城跡

昭和60年9月

高知県土佐郡鏡村教育委員会

序

川村兵庫介の砦と伝えられた吉原城の現地踏査は、昭和59年1月17日に行なわれ、村境の山頂にその遺構と思われるものが確認された。

本村においては、現在村史編纂の事業をすすめているが、この資料収集と城跡の保存・活用の方策樹立の目的をもって発掘調査を実施することとした。

調査にあたっては、高知県教育委員会文化振興課のご援助のもとに岡本健児先生（高知女子大学教授）、前田和男先生（高知追手前高校教諭）、宅間一之先生（県教委文化振興課）のご指導をえて、昭和59年10月17日より3日間実施した。

調査の結果、標高892mの山頂で風雪に耐えた馬酔木の下に埋もれていた山城の遺構が確認された。ここから北西にみる陣力森城、さらには田井古城や本山の「御土居」、南には重なる山々を隔て行川・長畠の城、さらに朝倉城へと結ぶことができる。まさに戦国の兵たちの雄叫が聞こえ、烽火の煙がのぞめる思いがした。山間地におけるこの種の城跡の発掘調査は類例が少なく、調査の成果は、今後の山城研究のためには大いに役立つものであろう。

報告書を発行するにあたり、御協力いただいた先生方、この発掘に進んで協力された地権者の三橋巖氏、また発掘作業に応援いただいた多くの方々に心から感謝し、あわせてこの報告書が中世山城の研究に、そして保存のための資料として広く活用されることを念じる次第である。

昭和60年9月30日

土佐郡鏡村教育委員会

教育長 今井盛義

目 次

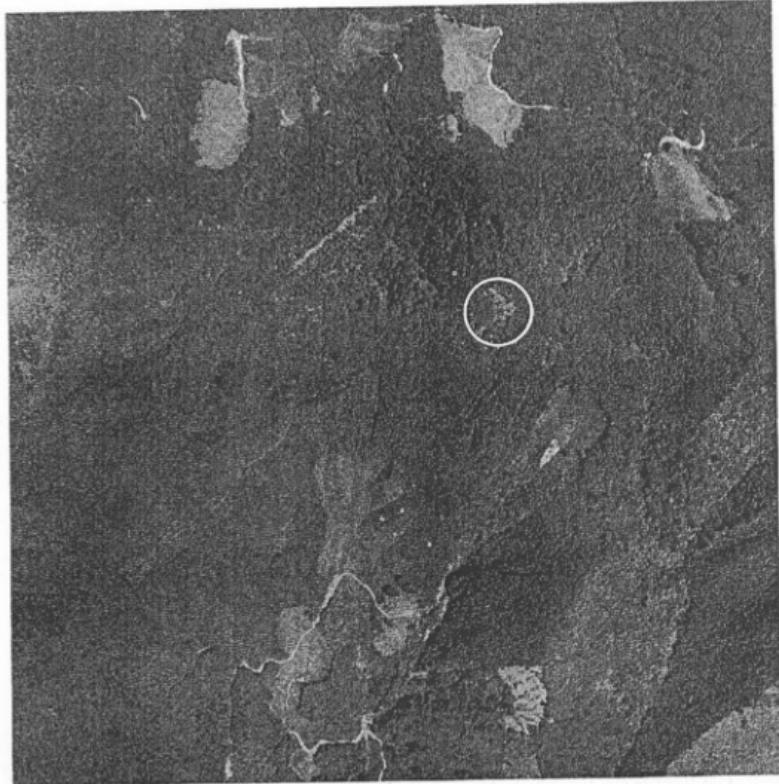
序

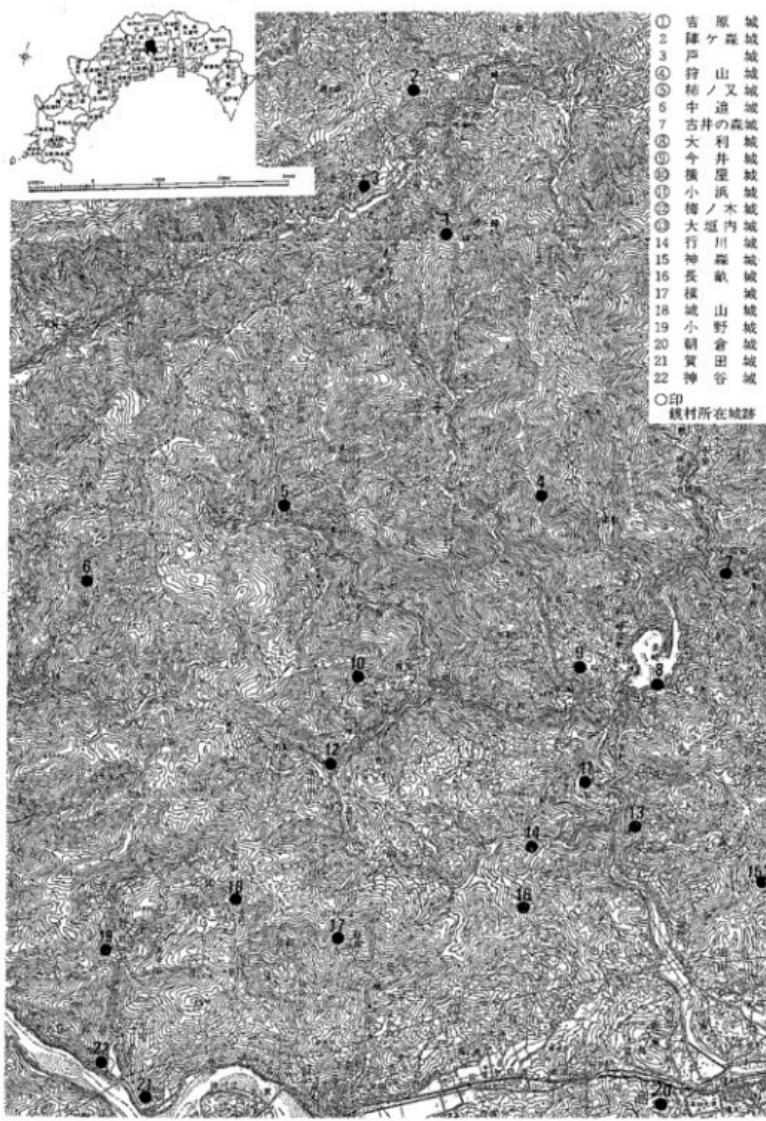
I. はじめに	1
II. 城跡の概要	3
1. 位 置	3
2. 由 来	5
3. 周辺の城跡	6
4. 城跡遺構	9
III. 調査の概要	16
1. 試	16
2. 土 型	22
3. 虎口とその周辺	25
IV. おわりに	31

I. はじめに

この調査は、土佐郡鏡村教育委員会が、村史編纂のための資料収集及び城跡保存方策の基礎資料を得るために実施したものである。調査は昭和59年10月17日から19日にかけて実施された。

発掘調査は、岡本健児高知女子大学教授（村史編纂委員）の指導のもとに、前田和男（高知県立高知追手前高等学校教諭・村史編纂委員）と宅間一之（高知県教育委員会文化振興課社会教育主事）があたった。また周辺地形の測量及び実測図の作成にあたっては、竹村善夫氏の協力も得た。本書の執筆は前田和男（II）と宅間一之（I III IV）があたった。





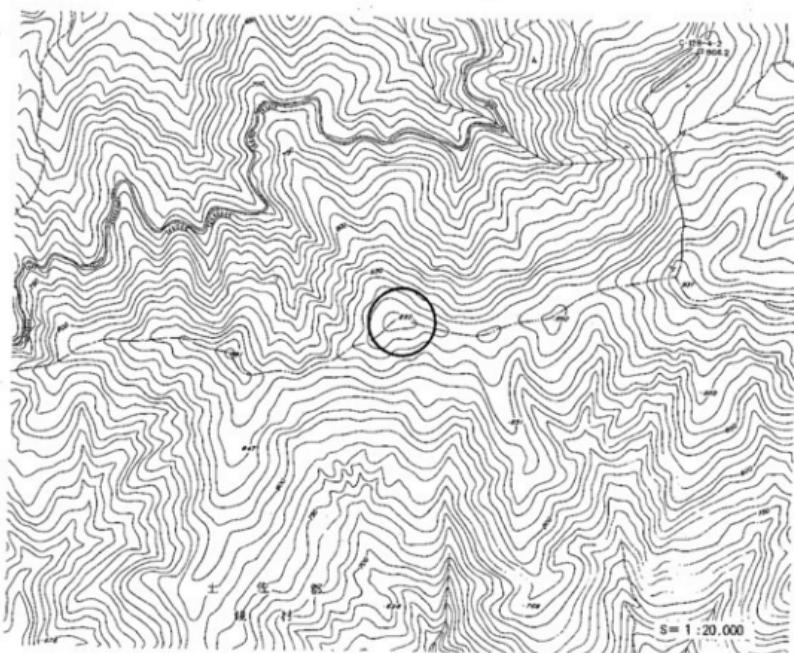
II. 城跡の概要

1. 位置

城跡は国土地理院2万5000分の1地形図「西石原」の北西隅より45.5cm、南西隅より27.7cmの土佐郡鏡村吉原城の台に所在する山城である。高知市の北西にあたり、鏡川の上流である。鏡村の中心地川口より吉原川に沿って県道高知・伊予三島線を北上し、杉谷地区で林道に分岐する。溪流杉谷川沿いに標高700m附近までは車で登れる。城跡の標高892mまでは雑木林・植林地帯を徒歩で登らねばならない。

城跡の南は、鏡村の山々の間から太平洋が望まれる。北眼下には吾川郡吾北村上八川の連行・小串田地区があり、その背後には標高978mの陣ヶ森や陣ヶ森城ものぞむことができる。城跡から東へは尾根続きに標高892mの樺ヶ峰に通じ、吾北村・土佐町そして鏡村の境界地点も間近である。

吾北村上八川連行周辺と城跡との比高は約460mである。





吾北村小申田周辺よりみる城跡



国見山山頂よりみる城跡

2. 由 来

城主は川村兵庫介といい、当地では吉原殿といわれている。川村氏は嶺北地方の豪族で、同時代史料も比較的多い。長岡郡本山町瓜生野の川村二三夫氏所蔵の「河村家筋向來申合之事」(『本山町史料』所収)によれば、

一、河村家ハ先祖近衛殿家ヨリニ二男河村別当茂友殿ト申人嫡子河村弥五郎栄友殿ニ男河村弥六友殿三男河村弥七友口殿ト[]十六代國口ニ而高安ニ居城嫡子河村弥五郎殿ヨリ十六代之朝臣河村刑部正為友殿男子三人被召連家来大勢引見し氏神様ヲ奉守護四國に渡海被仕阿州川中島に暫留逗留ト土佐国に踏人大河内に落着氏神様ヲ鎮座仕家来ニ散田ヲ開発為仕役ニ百姓ヲ有付直ニ大河内五ヶ村并近村共領仕本家ハ河村兵庫友光二男ハ河村四郎左衛門ト申迄九代領仕能有候所[]長宗我部江領知被奪浪人ニ成兵庫惣領ハ河村肥前守茂友四郎左衛門惣領ハ河村宇兵衛ト申候。

一、河村刑部正為友殿ハ惣領一所古味村ニ居城十代目之嫡胤川村肥前殿嫡子与左衛門二男三郎兵衛三男勇源兵衛

(中略)

一、川村兵庫弟川村四郎左衛門鰐川村宇兵衛新兵衛汗見川沢柿内村江住居仕船四郎左衛門惣領十兵衛ニ男庄左衛門三男左兵衛四男郷士川村又兵衛

(中略)

一、河村刑部正為友殿二男ハ代々大瀬村ニ居城被仕本山式部少輔殿詰之城本山城下ニ屋舗を構へ与力仕能有候所本山殿朝倉本山兩城落去之節川村隼人ト申浪人ニ罷成其躬跡助大瀬村名本ニ被仰付其伴新左衛門其郷士兼帶川村弥五右衛門其船川村平十郎郷士職沢田伝次郎江讓り男子無之右新左衛門弟勘右衛門江名本役相続仕其船幕七其船幕五右衛門其船幕藏

(下略)

とある如く、川村氏は近衛家の出で、為友のとき阿波を経て土佐に入国して大河内村に住みつき、「家来ニ散田ヲ開発為仕役ニ百姓ヲ有付直ニ大河内五ヶ村并近村共領仕」るが、なにしろ「先祖ハ公家の御身柄として田舎之來住居之人茂無之深山野山之所江被落着代々不輕苦勞被成僕」といい、その知行として

一、本山ニ而地方知行村大川内五ヶ村汗見川六ヶ村汗見村中鳴村

メ十三ヶ村

但東ハ寺家上ノ坊限リ西ハ中島立瀬限ト有

一、朝倉ニ而朝倉神道寺ニヶ村地方知行武百五拾[]

メ土佐國知行村數十五ヶ村

右之通本家川村惣次兵衛方ニ旧記有[]有之ニ[]村差除

を挙げる(同上文書)。川村氏の土佐入国時期については詳らかでないが、後掲の文書にみえる兵庫・四郎左衛門は為友から9代目にあたるとあるので、一代20年として160年を経過していくことになる。入国は南北朝時代であろうか。以来大河内五ヶ村を開発し、嶺北地方の豪族として成長、高知平野に進出して長宗我部氏と競った本山氏に仕えた。「河村家筋向來申合之事」は最初に読みとれぬ長い空白の部分があるが、この部分には川村氏が本山氏に仕えたことなどが記されていたのではないかろうか。本山氏に仕えた川村氏は、土佐入国以来開発につとめた大

河内5ヶ村のほか汗見・中嶋等の13ヶ村と朝倉・神通寺(現高知市)2ヶ村を知行地として宛行われたという。

川村氏に関する同時代史料は、『土佐国憲簡集』及び『土佐国憲簡集拾遺』に収められたれど文書であるが、これらの文書は永禄から元亀にかけてのもので、本山氏の勢力が後退しはじめやがて没落一滅亡する時期にある。

以心王院内証承之条櫻木生役荒合扶持候跡無油断忠義肝要候仍為後日如件

永禄武年

八月十日 貞茂(花押)

河村兵庫助職

この文書は、本山氏が朝倉城(現高知市)を拠点として吾川郡南部から高岡郡南部にかけて勢力を伸ばしていく過程における兵庫の働きに報いたものであろうが、文意が定かでない。この頃には本山氏配下の部将の上に、東方岡豊城(現南国市)に拠る長宗来部氏の勢力がのびてきはじめている。他の10通の文書は本山氏が長宗来部氏の圧迫に耐えかねて朝倉城を放棄し、本拠地本山へひき退いた永禄6年(1563)以降のもので、川村氏も当然本城から退いていたはずであり、内容的にも本城にかかわる字句はない。従って、同時代史料によって川村氏と本城との関係を知ることはできない。又川村家の古文書をはじめとする資料は火災によって焼失しているため、「河村家筋向申合之事」以外に伝えるものがないのは残念であるが、同文書に「一、朝倉ニ而朝倉神通寺二ヶ村地方知行武百五十拾□」とあるのが唯一の手懸りといえようか。しかし、これとても直接本城にかかわるものではない。

3. 周辺の諸城

吉原城は、鏡村と吾北村及び土佐町との境にある小規模な山城である。鏡村内には中世城郭として知られているものが10城あるが、そのうち白岩城については鏡村教育委員会の努力にもかかわらず所在地は未だ確認されていない。所在地の確認された9城は以下の通りである。

名 称	所 在 地	城 主
梅ノ木城	梅ノ木海老根	大黒與七兵衛
吉原城	吉原城の台	川村兵庫介
大垣内城	大河内ジョウガモリ	伊達入連
小浜城	小浜城ヶ平	吉松奴後守源光輝
横屋城	横矢タケノモト	横矢毛岐守
狩山城	狩山ツラ子キ	竹中弥右衛門
今井城	今井柄ノ木	今井大和守(今井左馬助)
柿ノ又城	柿ノ又西トヤノモリ	前田民部介
大利城	大利土居	大利民部介

『土佐物語』巻四は、本山氏全盛期の布陣を次のように記している。

先ず本山には本山佐護守、森には和田美濃守、白箸には種田岩右衛門、梅木には大黒與七兵衛、今井に今井左馬助、尾立に中内記、砂田に大黒主計、萬々に吉松式部、秦泉寺に秦泉寺大和、久萬に久萬豊後守、一宮に近藤某、國澤に園澤將監、高坂に大高坂権頭、井口に井口勘解由、福井に稻毛右京、神森に神森出雲、木塚に木塚左衛門太夫、其外吉良、秋山、西畠、仁野村、森山、神田等、詰り詰りに城廓を構へ勢を入置き、其身は朝倉に在城して、本山阿波、義井修理、鶴来糸紀伊守、吉良五郎兵衛、徳久左助、島田善左衛門、川村西郎左衛門、長越前

・同左近左衛門・竹中彌右衛門・中島新介・高石與七・岡崎與左衛門・河村兵庫・森本六郎次郎などという究竟の者共、是を守護す。柏尾山・鷺尾峯・三谷の峰・久禮野山・樅山・國見峯・其外山々峯々手寄々々に、烽火の場を定め、時々刻々に相図をなし、相救ふ事、毒蛇の首尾を合すが如くなれば、吉良を攻傾けん事は、中々思ひも寄らず見えにける。(下略)

白書は白岩と考えられるので、白岩の種田岩右衛門、梅ノ木の大黒與七兵衛、今井の今井左馬助、狩山の竹中弥右衛門、吉原の河村兵庫が本山氏の配下の部将として記されている。これらの城は、梅ノ木をのぞいていずれも吉原城のある櫻ヶ峰から流れる吉原川の谷間を見おろす地にあり、更にその下流には小浜城と大垣内城があって、いずれも吉原城から眺望することができる。大垣内城の南には本山氏の拠点朝倉城がある(吉原城からは見えない)。このような吉原城のあり方(位置)と遺構からすると、『土佐物語』のいう「山々峯々手寄々々に、烽火の場を定めて」とある「烽火の場」にふさわしい城といえようし、見張りの城ともいえようか。いずれにしても、本山城と朝倉城の間にあって「時々刻々に相図をなし、相救ふ事、毒蛇の首尾を合すが如き位置に吉原城はある。

即ち、吉原城の北西には陣力森城(現吾北村と土佐町の境)が相対し、陣力森城からは地蔵寺川の谷間を通して田井古城(現土佐町)が望まれ、更に本山氏の「御土居」の所在地(現本山町)を見通すことができる。吉原城が標高892m、陣力森城が標高1,013mと本山と朝倉を結ぶ諸城の中でも標高が高く、まさにその要の位置を占めている。その役割が共通したためであろうか、陣力森城の構えは吉原城のそれに似たものがある。参考までにその概略を記しておこう。

山頂の詰ノ段は、長軸が21m、短軸が20.8mの橢円形をなし、南半分に土壘の址をとどめる。土壘の幅は約2m、高さ30~40cmで、西側の土壘の切れ目に小祠がある。この詰ノ段下約2mほどのところに、詰ノ段下を包むように幅3~4mの段がめぐらされ、やはり南半分に幅約2m、高さ30~40cmの土壘址が残る。土壘はいずれも緩傾斜地にあり、土壘の址をとどめた部分は急崖をなしている(次頁の概略図参照)。

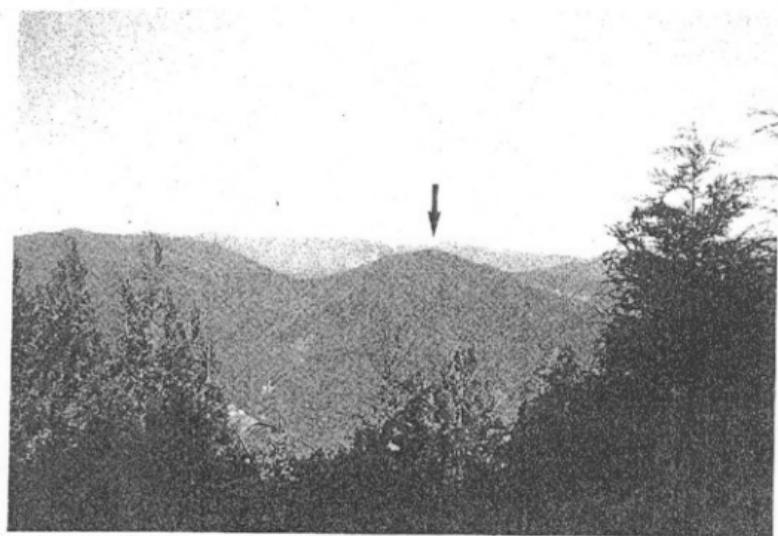


城跡より南方をのぞむ

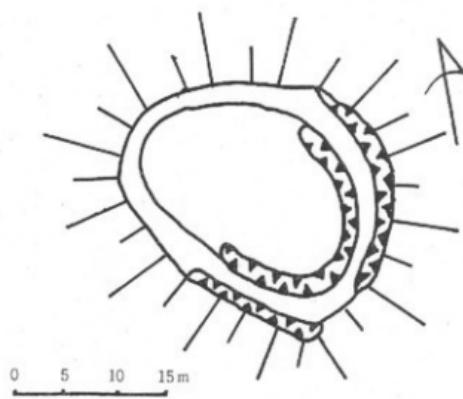
次
岬
首
馬
の
に
る。
り
」
も
位

川
ノ
諸
う

る。
m
2
分



城跡よりみる陣ヶ森城跡



陣ヶ森城概略図

4. 城 跡 遺 構

詰

詰は横円状の平坦面で、長軸25m、短軸13mの規模である。周囲には土盛の小規模な壘状地形がめぐり、南に1.8m幅で開口する虎口がある。西方三箇所には岩盤が露呈しているが、雑草や



詰 北部分



詰 南東部分

雜木はまばらで比較的良好な遺存状況である。

虎口より西方及び下方二ノ段への傾斜部分には自然石が若干露出しており、虎口西方の土壌内法端部には褐石の配石もみえる。

平坦面は東方がやや高く、東西両端のレベル差は40~50cmを測る。



詰 西部分



詰 虎口部分

土 堤

南虎口部分 1.8 m 区間を除き諸平坦部の周囲に存在する。たちあがりはゆるやかで薄鉢状の土盛である。詰を固む顕著な土堤として残存するのではなく、最も良好な道容状況とみられる虎口西方でも岸部と土堤頂部とのレベル差は 30~40 cm 内外で、北方は 10~20 cm 程度である。特に北東部分については、諸平坦部よりなだらかな傾斜をもつて土堤頂部を形成する程度となっている。

虎口横部分に配石されたものと思われる自然石もかなり埋没しており、このことなどから考慮すれば、土堤の内部、いわゆる諸平坦部へ周辺の土盛の土はかなり流入したことは十分考えられる。

土堤の外法面についても、雑木があり正確な形狀の把握が困難な地点もあるが、虎口西方及び東南隅部分には人頭大、あるいは 50×50 cm 程度の大石によって流土防止、あるいは切岸の強化がはかられている部分もある。明確な石積構造や石垣は形成されていないが崩壊や土流防止のための外法部分の堅固な仕上げには配重のあとがうかがえる。



虎口より西方の土堤

の土
る虎
に北
てい
考慮
られ
及び
化が
ため



詰 南西部と土壌

二ノ段

横円状の詰の下方に周る狭幅な郭である。詰中心部との比高は2m前後でほぼ同レベルで詰を巻いている。ただ北部から北東部にかけては村境・樅ヶ峰への山道として利用されており若干の傾斜が認められる。現状はすべて雑木が生えている。

二ノ段の幅は、上方土壌の流土やまた下方斜面への流土も考慮する必要はあるが、現状の計測によれば1.5~2.5m程度で、西方二箇所には岩盤が露出し二ノ段を塞ぐ形となっているところもある。

二ノ段以下の傾斜面については、東方は露出した岩盤よりゆるやかに下って尾根づたいに樅ヶ峰に接続する。南斜面は虎口の下方にあたり全般的にかなり急峻な地形である。西側は比較的ゆるく尾根を形成して下方に降っている。北斜面は急崖で大岩盤が露出し絶壁となっている個所もある。

三ノ段

詰の北西下方に、東西4~6m、南北10m内外の広さでやや北に傾斜した平坦面がある。詰中心部との比高は4m前後で、二ノ段とは2m程度である。この段より西側は緩く尾根が下方へ降り、北側は急崖な地形である。尾根道をねらう横矢の性格をもった郭とも考えられる。

現状は雑草や小木が生え、遺構等の確認は不可能である。

その他周辺には堀切り、堅堀などの遺構は全く存在しない。



二ノ段 南東部分（虎口部より東を見る）



二ノ段 南西部（虎口部より西を見る）



二ノ段 西部（二ノ段北西隅より南をみる）



二ノ段 北部（二ノ段北西部より東をみる）



二ノ段 北部（二ノ段北西部より東を見る）



三ノ段 周辺（二ノ段西部より見る）

III. 調査の概要

1. 話

調査は詰部分の構造物の把握を目的として、長軸に対し東西21m、幅2mの1TRを設定した。許容範囲内の雑木はすべて伐採し、根は遺構破壊に配慮しながらチエンブロックで除去し、発掘はすべて人力で実施した。

その結果1TR西端より7m部分から東3m区間に、柱穴状ピット1基と、自然石の集石部3箇所及び5個の自然石の点在を確認した。

これらの性格を把握するため点在する自然石の西端部、すなわち1TR西端より7.5m地点から幅4mで北方へ5.3m土壘直下までの2TRを設定した。

2TRでは小石に囲まれたピット1基と、集石部2箇所及び4個の自然石の散在を確認した。このため発掘区をさらに拡大し、2TRより東、1TRより北について土壘裾部までの全面にわたって発掘し、散在する自然石や集石群の性格確認につとめた。この発掘区からも5箇所の集石部と20個の自然石の散在を確認した。

平坦部上面には落葉が積り、その直下から10~15cmの腐植土層、以下10cm内外に腐植物の混入する黒色土があり、そのなかに集石群や自然石は検出された。それ以下は2TR以東はほとんど全面にわたってチャートの岩盤となる。2TR以西については第II層の柔かい黒色土層が続き、そ



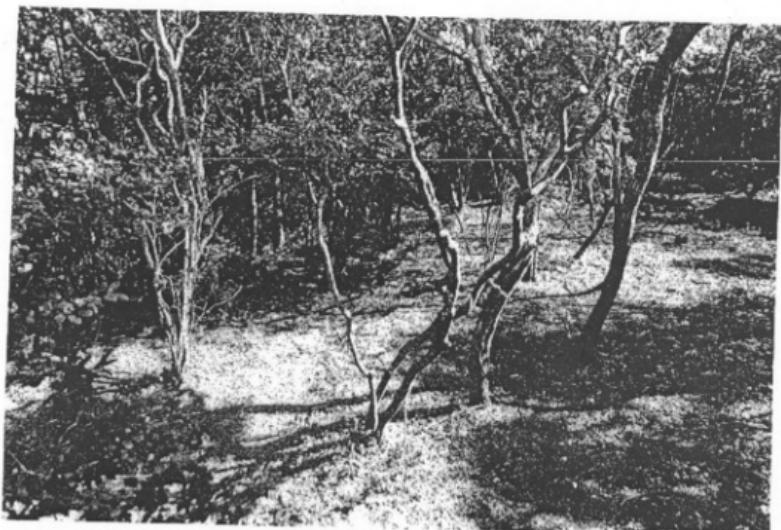
詰発掘前（西端部より東を見る）

のなかに地山形成の大きなチャートの石塊が3箇所にわたって露出している。

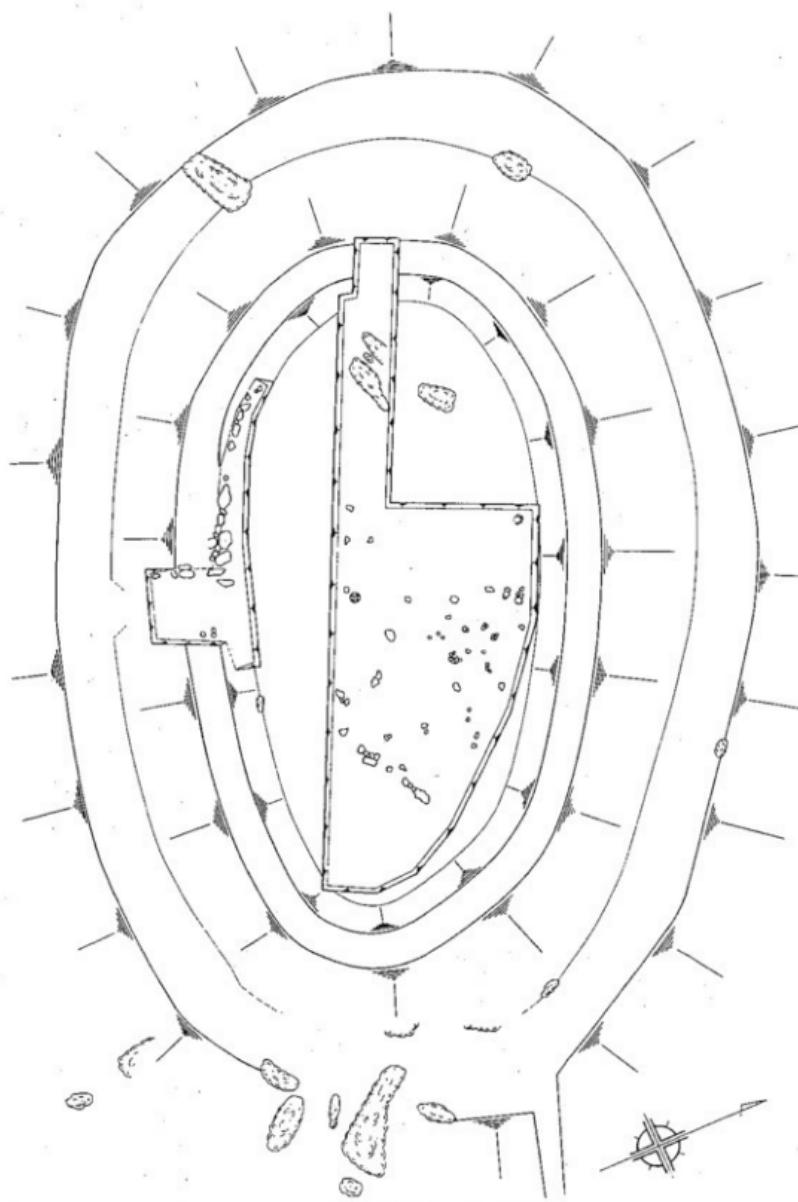
検出された遺構のうち、1TR中央部において検出されたピットは径15~20cmの円形で、深さ10cm内外でその性格は不明である。また2TR北西隅部分から検出されたピットも円形で、径20cm、深さ5cm内外、4個の小石が半円状に配石された形を呈しており、周辺からは若干の木炭片も検出されたが、配石については小石かつすべて浮き石で固定のあとはみられず、きわめて小規模で人工のものか否か、また木炭片についても人間とのかかわりを想定する資料はなく、城跡に間違をもつ遺構・遺物として把握することは不可能であった。

詰北東部分の発掘区全域にわたって発掘された集石群や自然石はすべて地山を形成するチャート片であり、若干のものについては礎石と判断可能なものも存在するが、多くが小石である。また集石群のなかには礎石下の根石を想定させるものもないではないが、すべて検出状況は散在しており規格性を認めることはできない。地山を形成するチャートの破片が自然に集石したり点在したものとみるのが妥当ではなかろうか。

なお詰部分の南北はほぼ同レベルであるが、東西両端は40~60cmのレベル差をもって東方が高い。おそらく築城前の自然地形は、東部から西へ順次降る尾根が形成されており、その傾斜した尾根を掘削・削平し、東部の土は西部や南北の低部へ埋められて平坦面を築造したものであろう。2TR西端以西については、3箇所の岩盤部を除いて柔かい黒色土が埋められているのに対し、2TR以来は腐植土層15~20cm下はチャートの地山がほぼ全面をおおっていることが、それらのことを実証するものである。



詰発掘前（東端部より西を見る）



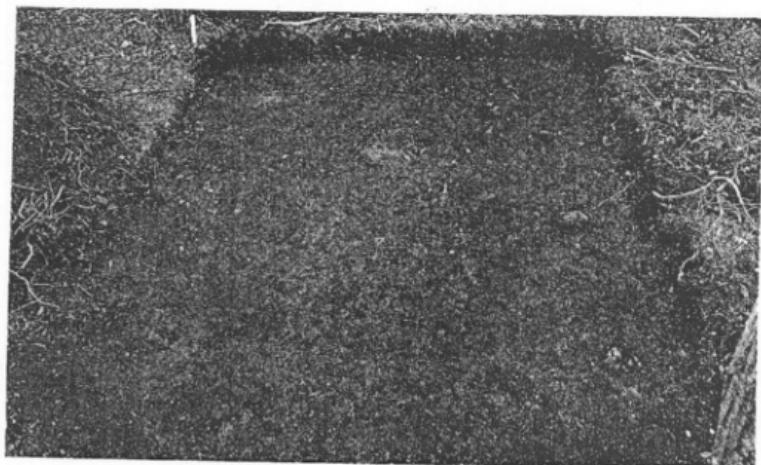
調査区設定図 S = 1 : 200



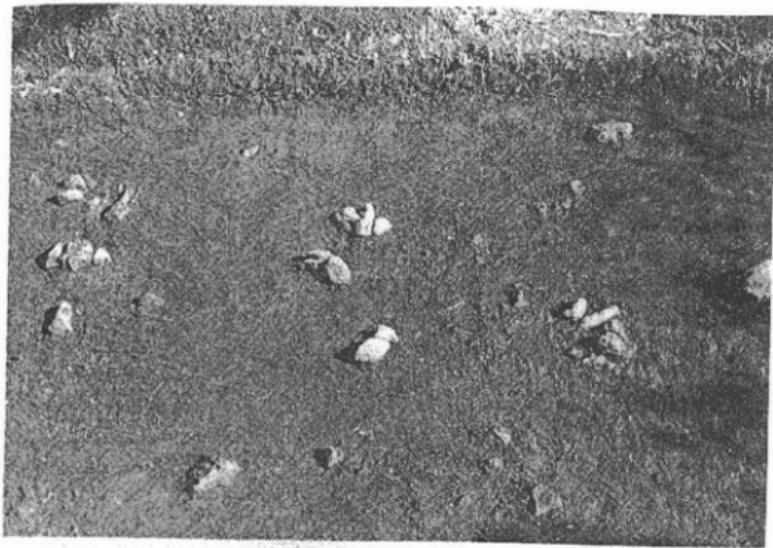
1・2 TR 西より



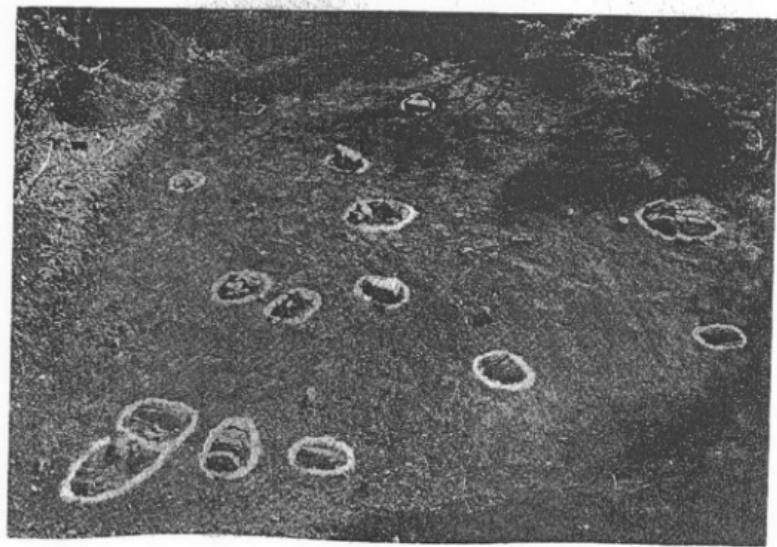
1・2 TR 東より



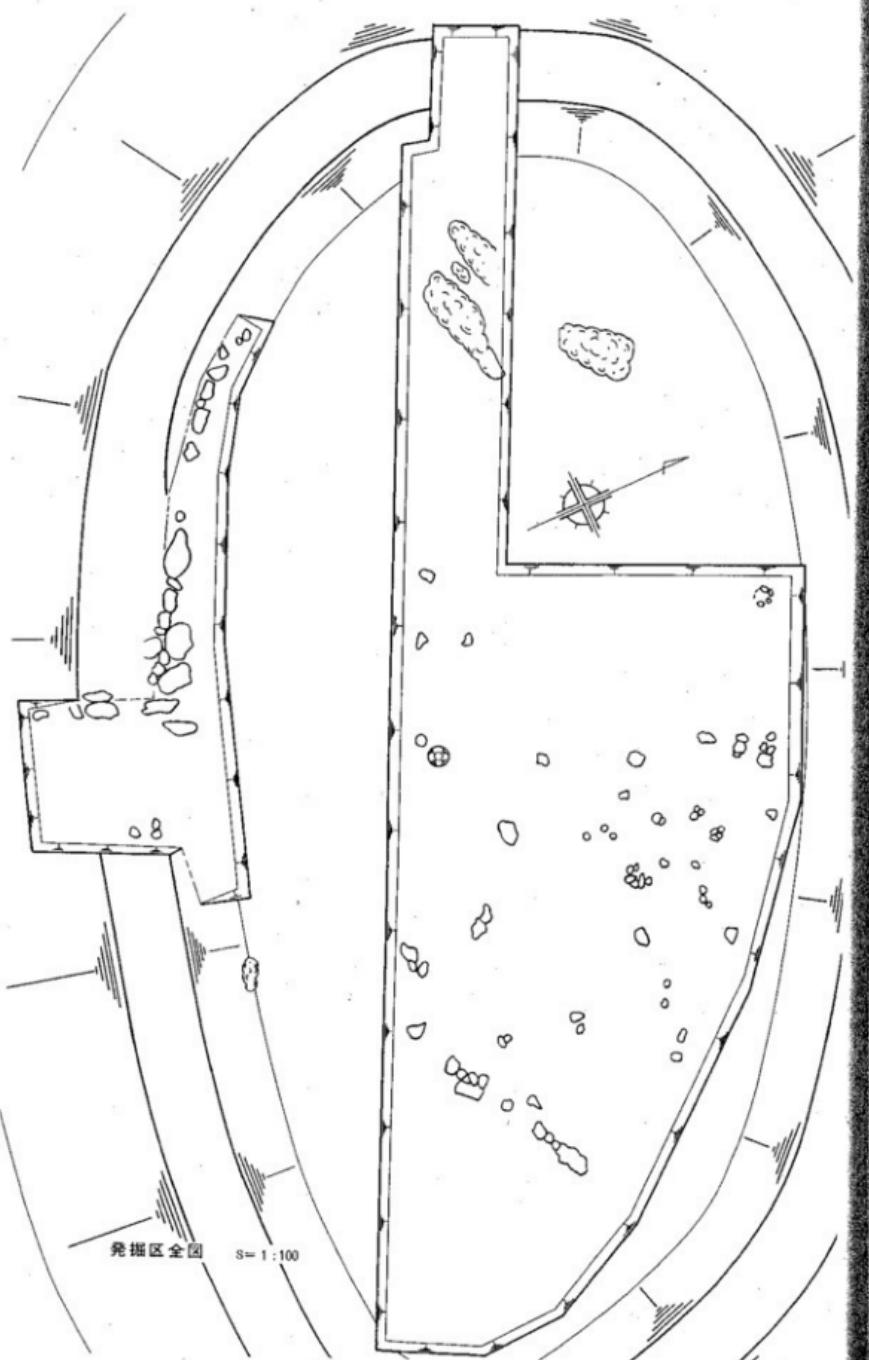
2 TR 南より



石群検出状況（南より）



石群検出状況（西より）



発掘区全図

S=1:100

2. 土 墓

土墓の土盛状況把握を目的として 1 T R 西端部を 1.2 m 幅で 2 m 西方へ延長し、土墓の断面観察を実施した。

周辺土壌は小規模な土盛状地形を呈しており、内法端部と頂部のレベル差は 40~50cm 程度で、傾斜角度は 10 度前後である。下方二ノ段との比高は 2.1 m、傾斜角度は 30 度程度の小規模なものである。形態は蒲鉾状を呈しており、内法・外法面とともに土流留の襆石などの配石は全くない。

調査は 1 T R の掘り下げ面と同レベルまでの発掘で止め、地山までの調査は実施しなかった。断面はともに第 I 層の腐葉土層は 15~18cm ではば平行な層位を示し、礫などは全く混入もせず黒色を呈している。第 II 層の黄色土層も 10cm 内外ではば平行な層を示しており、若干の小角礫が混在する。第 III 層は黒ボクの層で、各断面にレンズ状に挿入した形を示している。この層中には全く礫などは含まない。第 IV 層は極暗赤褐色土層で、その直上には拳大や 20×15cm 程度の角礫が数個列状に配石されている。土墓頂部から 40cm 下方に配された角礫群である。この層以下については発掘しなかったが、ボーリング調査によれば、以下 50cm 程度の深さまでは暗褐色土の柔かい層が続き、その下に岩盤らしいものが存在する。岩盤上への埋めたて、その端部への土墓構築のための土盛の状況を示す層位とみるべきであろう。



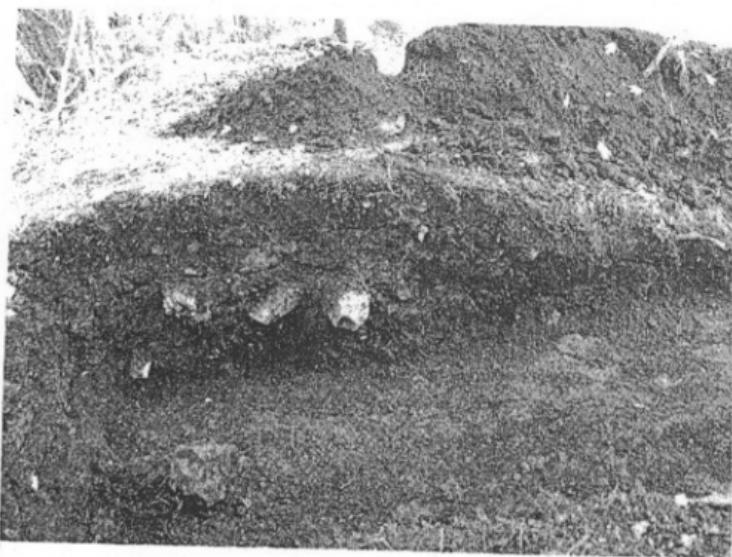
土墓部発掘状況



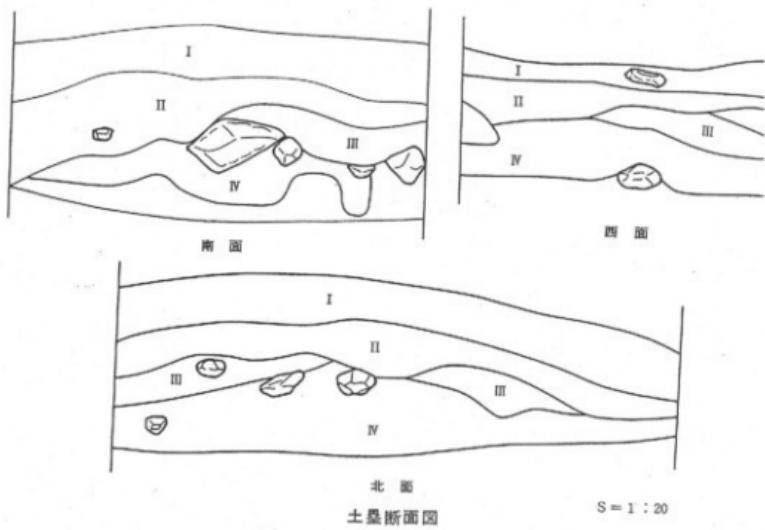
土星南面断面



土星西面断面



土壘北面断面



3. 虎口とその周辺

虎口は楕円状の詰の長軸線にはば直角に南面し 1.8 m 幅で開口する。虎口西岸及び西土壌内法端部には数個のチャート片が地上に一部露出し、人工による配石状況が地表観察でも確認できる。東方にも 1 個が露出している。

虎口中央部と西土壌頂部とのレベル差は 40~50cm、東土壌とは 10cm 内外のものである。

調査は虎口部の構造と、土壌内法端部の配石状況の把握を目的にすすめ、発掘は遺構保存に配慮し、その確認のみにつとめた。

虎口部については、東西 3 m、南北 3.5 m のトレンチ状に腐葉土を排除して遺構の確認につとめた。この結果、虎口西岸部には 3 m 区間に 6 個のチャートが配され、特に 60×25cm、70×45cm、65×25cm の 3 個を中心堅めには垂直なちあがり部分の土流防止の役を十分果している。ただ 60×25cm の石については、その形態、位置、方向等からして裾石とするよりむしろ門柱の据石とも考えてよさそうなものである。

一方東岸は、なだらかな緩傾斜をもつ盛土状の形を呈しており、西岸のような配石状況はみられない。ただ西岸門柱据石状の石から 1.8 m 地点に 3 個の小規模なチャート片が散在しており、その位置等から東門柱の裾石と理解できないこともない。また土壌内法端部の裾石について有無確認のトレンチも設定し、調査を試みたが配石遺構の確認はできなかった。

虎口部から二ノ段への下降部分は、腐葉土・腐植土を除去し遺構の確認につとめたが、段状遺



虎口部発掘前（詰側より）

構や石段など予想される遺構は全く検出できず、約23度の傾斜をもって二ノ段に降っている。この傾斜部分についても流土による遺構破壊の可能性もあり、これ以上の調査の実施はひかえた。

虎口西土塁内法端部の裾石は、虎口部から西8m区間に22個の配石がある。虎口部より西へ4m区間には40×70cm, 30×100cm規模の大石を配している。そこから途切れた1m区間をあけて西へ2.5m区間は小規模な石の配石状況である。全体的に配石状況は乱雑であり、一部欠損の部分もある。後世の破壊によるものであろう。従って虎口より西の配石総延長は確認できないが、その配石状況から、土塁内法端部へは可能なかぎりの大石を配し、その背後からは小規模な石をつめ強化をはかり、その上に盛土して土塁を形成している。西方2.5m区間に残る小さい配石部

は、すべてつめ石と理解すべきであろう。近年近辺に築造された薪炭窯に利用された石も多いと伝えられており、かなりの破壊も考慮しなければならない。

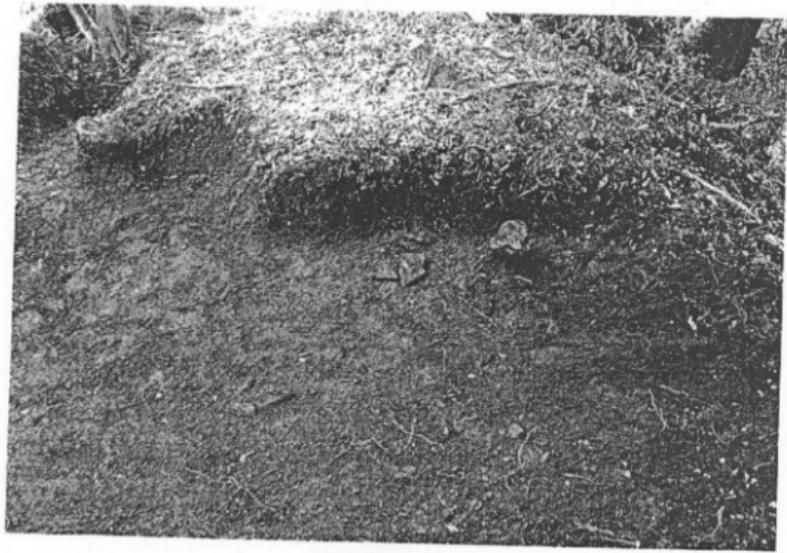
なお完掘時点の虎口中央部と東端土塁頂部、西端土塁頂部及び二ノ段平坦面とのレベル差はそれぞれ0.8m, 1.1m, 1.64mである。



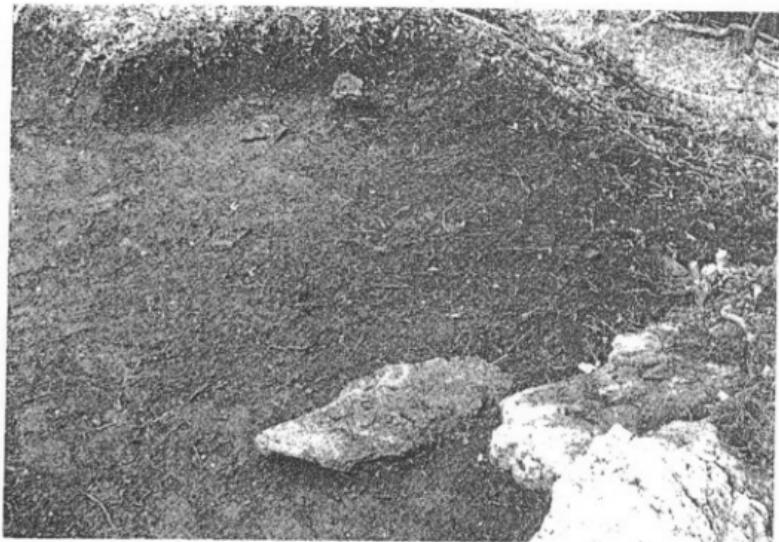
虎口部及び土塁内法端部配石状況



虎口西岸配石状况



虎口東部分發掘狀況



虎口部発掘状況（西より）



虎口発掘状況（二ノ段より）